

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	2019 年度
氏名	白子 英治	指導教員 (主査)	會田 玉美

論文題目	意思疎通困難となった妻や母親を介護する 男性介護者の介護生活継続プロセス
------	---

本文概要

本研究の目的は意思疎通困難となった妻や母親を介護する男性介護者の介護生活継続プロセスを明らかにし、訪問作業療法への応用を検討することである。対象は1年以上在宅介護をしている夫もしくは息子であり、データ収集法は半構成的面接を実施した。分析は介護生活の継続プロセスは社会相互性とプロセス性を有しているため、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。結果、対象者5名は全て65歳以上であり、被介護者との続柄は夫3名と息子2名であった。意思疎通困難となった妻や母親を介護する男性介護者の介護生活継続プロセスは、7のカテゴリーと30の概念で構成された。男性介護者は、妻や母親に対するいままでの感謝と恩返しの気持ちの強さから【介護の意志をもつ】。しかし、意思疎通の困難さから自分の思うように介護ができず、介護の【ストレスに気付く】。妻や母親の【意思疎通を模索する】と同時に、【対応に奮闘する】。様々な介護および医療の支援を受けることにより、スケジュール化された【介護を仕事に感じる】ようになる。介護スケジュールの決まった生活が安定して気持ちに余裕ができると、介護には辛いことばかりだけではなく、面白い気付きもあり【介護は大変なことばかりじゃない】ことに気が付く。さらに介護は永続的ではなくいつかは終わりがくるものであると感じると、自分の【将来のことを考える】し、社会への貢献を考える。そのことによりまた被介護者への感謝の念を持つというプロセスであった。男性介護者は意思疎通を模索しながらも様々な支援を受けることにより介護スケジュールをマネジメントし、介護を仕事のように感じることで介護ストレスを解消してきたと考えられる。訪問作業療法では介護という個人的な体験を社会的な意義に繋げられるように介護の意味付けや社会との繋がりを提案することが重要であると考えられる。